

## 魔術

芥川龍之介

ある秋雨のふる晩のことです。わたくしをのせた人力車は、何度も大森かいわいのけわしい坂を上ったり下りたりして、やっと竹やぶにかこまれた、小さな西洋館の前にかじぼうをおろしました。もうねずみ色のペンキのはげかかった、せまくるしい玄関げんかんには、車夫のさしだしたちようちんの明りで見ると、インド人マティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、せともの標札がかかっています。

マティラム・ミスラ君といえは、もうみなさんの中にも、ごぞんじの方が少なくないかもしれませんが。ミスラ君はなが年インドの独立をはかっているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門ぼらもんの秘宝をまなんだ、年の若い魔術まじゅつの大家なのです。わたくしはちよ

うど一月ばかり以前から、ある友人のしょうかいでミスラ君とこうさいしていましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、かんじんの魔術を使う時には、まだ一度もいあわせたことがありません。そこで今夜は前もって、魔術を使って見せてくれるように、手紙でたのんでおいてから、当時ミスラ君の住んでいた、さびしい大森の町はずれまで、人力車をいそがせてきたのです。

わたくしは雨にぬれながら、おぼつかない車夫のちようちんの明りをたよりに、その標札の下にあるよびりんのボタンをおしました。するとまもなく戸があいて、玄関へ顔をだしたのは、ミスラ君のせわをしている、背のひくい日本人のおばあさんです。

「ミスラ君はおいでですか。」

「いらっしやいます。先ほどからあなたさまをおまちかねでございました。」

おばあさんはいそよくこういいながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へわたくしを案内しました。

「今晚は、雨がふるのに、よくおいででした。」

色のまつ黒な、目の大きい、やわらかな口ひげのあるミスラ君は、テエブルの上にある石油ランプのしんをひねりながら、元氣よくわたくしにあいさつしました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見できれば、雨ぐらいはなんともありません。」